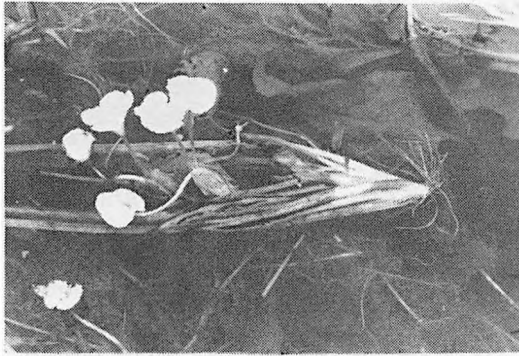


セタカミズオオバコについて

大滝末男
(聖徳短大)

水草研究会第3回全国集会で、発表したトチカガミ科のセタカミズオオバコ(図1.新称)は福岡県山門郡瀬高町の水田地帯の小川で、1980年9月21~22日に筆者が撮影したものである。

ミズオオバコ属 *Ottelia* Pers. は従来、日本にはミズオオバコ *Ottelia alismoides* (L.) Pers. ただ一種しか生育していないことになっているが、これとは明らかに異種であると断定できる。葉形や花形ならびに株の大きさなどは大きな相異点がみられないようである。しかし、ミズオオバコは1つの苞鞘(仏炎苞) spathe から1個の花しか抽出しないが、セタカミズオオバコは多数(12~73個)の花を抽出する点が著しく異なる。なお、瀬高町にはミズオオバコも生育しているが、花期はミズオオバコよりやや遅く9~11月まで開花する。

さて、セタカミズオオバコの発見者は、瀬高町在往で、山川南部小学校教頭の釘嶋善治先生である。今回、筆者の発表に際し、彼は表1~2に示すようなデータ(付表参照)を持参して集會に臨み、かつ幼少の頃(約50年前)より、生家の横を流れる小川に生育していたことを証言された。

この植物について、彼は数年前から関係各方面に問い合わせをしてきたそうであるが、らちがあかず、結局昨秋になって筆者の現地訪問によってようやく、その存在が確認されたものである。瀬高町一帯の休耕田には、ウキアゼナやアメリカコナギの帰化植物も群生しており、よく調査すればなかなか注目すべき水草類が分布している地域でもある。

セタカミズオオバコなる和名は、地名を記念して、筆者が命名したものであるが、筆者自身全くの初見であり

手許にある内外の文献中には該当するものが見られない。しかし、会員であるお茶の水女子大学の山下貴司先生は、1980年2月5日に、Journal of Botany の Vol. 72 (1934) と Vol. 73 (1935) に『Notes on Hydrocharitaceae I および II』として、イギリスの J. E. Dandy (1903~) が発表した論文のコピーを筆者に提供して下さった。この2つの論文には、おもにアジア東南部地域に生育しているミズオオバコ属には、日本に生育しているミズオオバコ他に、8種類の存在について述べている。セタカミズオオバコは多分この8種類の中の1種が、かなり以前から九州の中央部に渡来したものであると考えられる。筆者はまだ検討不十分なので、学名の同定を見合わせている。今回は、本日の集会で、筆者のカラーズライドと釘嶋氏のデータのみを公表し、詳細は後日に譲ることにした。

なお、釘嶋氏によれば、現在瀬高町以外の生育地は佐賀平野の一部に確認しているだけである。一方、本会の初代会長である琉球大学の原田市太郎先生は、名古屋大学に在職中で、いまから約20年前に、宮崎県の某氏からセタカミズオオバコに類似(?)の水草の提供を受け、これについて、すでに発表しているという。多分、セタカミズオオバコと同一の水草であろうと筆者は考えるものであるが、正式な発表は、後日、改めて原田先生と共同研究する予定である。今回の発表に関し、ご協力下された山下貴司・釘嶋善治両先生に深く感謝申しあげる。

(昭和56年8月23日 記)

付表) セタカミズオオバコに関する測定値の一覧表が、当日参加者に配られ、その表を載せるようにと大滝氏から送られてきました(表1.2)。しかし、この表は生のデータというべきもので、そのまま載せるのは適当でないと判断し、スペースの関係もあって当方で少し整理させていただきました。御了承下さい。(編集部)

セタカミズオオバコに関するデータ

(測定者 釘嶋善治 昭55.9.12)

I. 1. 個体について(平均的なもの)

- ・花軸…11本(蕾だけ2本、花のあるもの6本、苞鞘が朽ちたもの3本)
- ・花梗…最も長いもの16cm
- ・葉 …30枚、葉柄45~50cm、葉身の長さ12~16cm 幅5~10cm

○根 …ひげ根

II. 自由に選んだ100個の苞鞘について

1. 苞鞘の中の蕾(花)の数

蕾数	数
11-15	8
16-20	15
21-25	37
26-30	19
31-35	6
36-40	2
41-45	5
46-50	3
51-55	2
56-60	1
60-65	1
66-70	0
71-75	1

2. 苞鞘の大きさ

幅(mm)	数	長さ(mm)	数
5-10	1	36-40	2
10-15	5	40-45	3
15-20	12	45-50	8
20-25	21	50-55	11
25-30	18	55-60	25
30-35	17	60-65	24
35-40	21	65-70	24
40-45	4	70-75	3
45-50	1		

3. ひだの条数と苞鞘数

ひだ数	3	4	5	6	7
数	7	28	32	20	5

4. ひだの大小の比と苞鞘の数

大きなひだ数	3	3	3	3	3	4	4	4	5	5
小さなひだ数	0	1	2	3	4	0	1	2	0	1
苞鞘の数	7	28	21	16	5	1	7	4	3	2

5. 滑らかなひだ40苞, とげとげしいひだ33苞

6. 花床の花梗の極?……2, 3が最も多く, 4があり, 5極も稀にある。

走査電顕でみたウキクサ科植物の花と種子(要旨)

別府敏夫
(京大・農・応植)

ウキクサ科植物はアオウキクサ (*L. paucicostata*) を除き, 自然環境下では稀にしか花や種子をつけないため, 従来の分類では, おもに栄養器官を分類形質として用いてきた。しかし, このグループの植物は極端に単純化した体制をもち, また, 栄養器官は環境条件により著しく変化を受けることなどのため, 分類の困難な種類があった。

最近, サルチル酸や安息香酸で処理すると, ウキクサ科植物の大部分に開花させることができるようになった。そこで, おもに日本に分布するウキクサ科植物を中心に, 花と種子を走査電顕で撮影し, 分類形質として検討した。

Spirodela 属: 日本には *S. polymorpha* と *S. punctata* が分布し, この2種は栄養器官だけでも分類できるが, 花や種子でも十分同定できる。*Lemna* 属: 特にこの属は栄養器官だけからは, 同定困難な種類を含む。

L. paucicostata と *L. perpusilla* は栄養器官だけでは, まず同定不可能といってよい程分類が困難であるが, 種子表面の縦すじを比較すると, 前者は15-22, 後者は40-52であり, 容易に区別できる。同様に *L. minor* と *L. gibba* も種子により分類できる。また, *L. paucicostata* は日本国内に3つの生態型を区別できるが, 栄養器官からは, これらの同定は困難であるが, 花をみれば分類できる。*Wolffia* 属は日本には1種類のみが分布し, 花は1本の雄ずいと1本の雌ずいだけから構成されるが, 種子は残念ながら得られていない。